

## 聖書の文学構造「サムエル記」

ウィリアム・D・レイミー著 松田出訳

THE LITERARY DESIGN OF 1 SAMUEL-1 KINGS 2 - Dr. William D. Ramey

原著: <http://www.inthebeginning.org/>

サムエル記(ヘブル語聖書では第一サムエル記と第二サムエル記はひと続きの書物)は「ダビデ記」と称する方が、あるいは適切かもしれない。主人公はサムエルというよりダビデだからだ。サムエル記のテーマは、神のみこころを求め続け、神のみこころにかなってイスラエルの王座に着けられたダビデの生涯である。サムエル記におけるダビデの生涯を一時代一テーマとして、六つ程度の部分に分けるのが通例である。しかし構造を詳しく調べると、第一列王記1:1~2:46を合わせて、明確に7つの部分で構成されていることがわかる。また、それぞれの部分もたくみに設計された内部構造を持っている。概略は次のとおり。

1. サムエルの誕生、支配(第一サムエル記1-7)
2. サウル、支配する、過ちを犯す、神に拒絶される(第一サムエル記8-15)
3. サウルの王宮でのダビデ(第一サムエル記16-20)
4. ダビデ、逃亡者になる(第一サムエル記21-31)
5. イスラエルの王となったダビデとサウルの家への寛大さ(第二サムエル記1-8)
6. ダビデの罪とその恐ろしい結末(第二サムエル記9-20)
7. ダビデの最後の年とソロモンの即位(第二サムエル記21-第一列王記2)

## 第一サムエル記1:1-第一列王記2:46の概略

第一サムエル記1:1-第一列王記2:46の文書は、基本的に歴史の流れにしたがって記述されている(概略0参照)。少なくとも以下に述べる構造の概略によって、キーワードのくり返しなどの箇所で行なわれているかを知ることができる。キーワードのくり返しは、構造の対称性を見つけ出すのに重要だ。たとえば、エリの息子たちの悪行のストーリー、ジフ人がダビデを裏切るストーリー、ダビデがサウルの命に手を下さなかったストーリーなどは、それぞれ並行する二つのストーリーから構成されていることがわかる。

テーマはそれぞれ特定の構造によって補強されている。たとえば、サウルとサウルの家でダビデがいつくしみを施すストーリーには驚くほど多くの他のストーリーが並行している。これらによってダビデの忠実さが強調されている。明らかにサムエル記の目的のひとつは、ダビデがサウルとサウルの家にとって敵になり、罪に定められた状態を示すことにある。

同時にサウルの子供たちがいかにダビデを愛していたかについてのストーリーもまた、たくみに配置され、サウルの法廷においてダビデに罪がないことを強調する。また、別の箇所ではダビデを弁護して、彼が確かに神のみこころにかなうイスラエルの王であることを明らかにしている。

サウル、サウルの家と王宮の者、シムイのような敵に対するダビデのあわれみについてのストーリーが並行しているのも興味深い。これらの並行関係にあるストーリーは、賞賛すべきダビデの生涯を示す上で目を引く。

そればかりでなく、ナバルへの復讐を思いとどまったダビデのあわれみ深さがストーリーの中心になっている。ここでのポイントは明らかだ。つまり神のみこころを求める者は、個人的な敵への復讐を求めることはしない。彼はかえって、すべてをご存知で義であられる神にゆだねるのだ(第一サムエル記16:12)。

## ■概略0 第一サムエル記1-第一列王記2:46の構造

### A サムエル、エリの後を継ぎ、イスラエルを支配する(第一サムエル記1-7)

ーハンナの歌:

わが角、わが岩、墓、死、天からの雷鳴、高く上げる、  
力を帯びる、暗黒、足、油注がれた者、王に与える、  
へりくだる、たかぶる、ただひとりの神、などなど

ーテーマ: 祭司エリの家が絶える

ー主による疫病とそれをとどめようとする人々の試み(4:1-6:21)

ー人々、2頭の雌牛に契約の箱を引かせる

雌牛は全焼のいけにえとなる(疫病がやんだ後)

牛が引く車はたきぎとなり、岩の上に契約の箱がすえられる

### B サウルの過ち(第一サムエル記8-15)

ーアモン人の王ナハシュに対する戦いがイスラエルへの侮辱から始まる

ーサウルの罪が明らかになり、サムエルがこれを責める

ーサウルの反応: 言いわけ

### C サウルの王国でダビデがはじめて名声を得る(第一サムエル記16-20)

ーサウルははじめダビデを受け入れ、ついで敵対する

ーダビデがサムエルに油を注がれ、ミカルがダビデと結婚する

ーテーマ: サウルの家の者、ダビデに好意を寄せる

### X 主がサウルとダビデの将来を逆転させる

#### サウルがダビデを殺そうと謀るが自分が死ぬ(第一サムエル記21-31)

### C' 全イスラエルでダビデがはじめて名声を得る(第二サムエル記1-8)

ーサウルの王国ははじめダビデを拒絶し、ついで受け入れる

ーダビデがユダに油を注がれ、ミカルがダビデと再婚する

ーテーマ: ダビデ、サウルの家の者を丁重に扱う

### B' ダビデの過ち(第二サムエル記9-20)

ーアモン人の王ナハシュに対する戦いがダビデの使者への侮辱から始まる

ーダビデの罪が明らかになり、ナタンがこれを責める

ーダビデの反応: 悔い改め

### A' ソロモン、ダビデの後を継ぐ; ダビデの最晩年(第二サムエル記21-第一列王記2)

ーダビデの歌(ハンナの歌と明らかに呼応している):

わが角、わが岩、墓、死、天からの雷鳴、高く上げる、  
力を帯びる、暗黒、足、油注がれた者、王に与える、  
へりくだる、たかぶる、ただひとりの神、などなど

ーテーマ: 祭司エリの家が絶え、ツァドクがエブヤタルにとって代わる

「シロでエリの家族について語られた主のことばはこうして成就した」(第一列王記2:27)

ー主による疫病とそれをとどめようとする人々の試み(第二サムエル記21, 24)

疫病のひとつは契約の箱のある場所を打つ

ーダビデ、打穀用の2頭の牛を全焼のいけにえにする(疫病がやんだ後)

牛の用具をたきぎとして使う(契約の箱は岩の上にある)

サウルとダビデそれぞれの破滅的な罪が並行的にくり返されているのは、もうひとつの重要なポイントだ。両方のストーリーにおいて罪が詳しく描かれている。神は彼らの罪をあばいて責め、罪の恐るべき結果をもたらされる。サウルは王国と自身の命を失い、ダビデは家族を引き裂かれる。このくり返し構造は、イスラエルの指導者(および民)が神と律法に従うことがいかに重要であるかを教える。さらに、サウルとダビデそれぞれの反応が対比されているが、罪を犯したときにはダビデのように真剣に悔い改めるべきであり、サウルのように弁解に終始してはならないのだ。

その他にもくり返しによって展開されたり補強されたりするテーマがある。主の導きを求めること、逆境にあっても主に従うことの重要性についてのテーマだ。たとえば、ダビデがいのちの危険を顧みずにユダの町を助けたことがそれにあたる。

最終的に神は悪を正し、悪者を罰し、正しい者に報いるというテーマは、最も大切なテーマのひとつだ。悪者が一時的に栄えることもある(エリの息子たち、サウルなど)。しかし、神は必ず彼らに罰を与えずにはおられない。それとは逆に、正しい者が極端な苦しみに会うことがある。しかし、神は彼らの苦しみの間も彼らとともにおられ、守り導いておられる。このポイントは、たとえば、悪いサウル王からダビデが奇跡

的に逃れたストーリーが並行していることによって強調される。神はみこころに従う者を必ず守ってくださる。サムエル記を読む者は、神と神の律法に従うべきことに気付かされる。神は最終的に、従う者に良く報い、神を避ける者に罰を与えてご自分の律法の正しさを見せてくださるのだ。

## I. サムエルの誕生と支配(第一サムエル記1-7)

最初の大きなストーリーのまとめ(概略1)はサムエルについての話で始まる。サムエルは、ダビデの王座の確立に重要な役割をはたす預言者だ。この箇所はサムエルの誕生で始まり、サムエルの支配を要約して終わる。「サムエルは、一生の間、イスラエルをさばいた(7:15-17)」。この箇所は、時間の順に並べられた七つの部分からなっている。その構造は対称性を持ち、主がサムエルを呼ぶ場面が中心に置かれている。

### ■概略1 サムエルの誕生と支配(1-7)

#### A 導入:サムエルの誕生と主への生涯献身(1:1-2:11)

- ラマに生まれる
- サムエルの家族、毎年ラマからシロに上る
- エルカナ、ラマの家に帰る

#### B エリによこしまな息子たち、天幕で主をさげすむ(2:12-26)

- イスラエルの祭司が主の天幕とささげ物を侮る

#### C エリの息子たちが一日のうちに死ぬという預言(2:27-3:1a)

#### X サムエルが主に呼ばれる(3:1b-4:1a)

#### C エリの息子たちについての預言が成就し彼らは死ぬ(4:1b-22)

#### B' 契約の箱の放浪:ペリシテ人が主の契約の箱を敬う(5:1-7:1)

- ペリシテ人の祭司が契約の箱を敬っていないかえをささげる

#### A' 結び:サムエルの勝利とイスラエルにおける支配の生涯(7:2-17)

- サムエル、ラマに住む
- サムエル、各地を行きめぐってラマに戻る
- サムエルは常にラマに戻る

第一サムエル記1-7をもっと細かく分けても同じ構造になる。たとえば、サムエル誕生のストーリーがそうだ(概略1.1)。サムエルの誕生は、主の導きが逆転することを強調している。「逆転」はサムエル記の基本テーマだ。サムエルの誕生がストーリーの中心に置かれていることに注目しよう。

### ■概略1.1 サムエルの誕生(第一サムエル記1:1-2:11)

#### A エルカナと家族、毎年ラマからシロへ上る(1:1-8)

#### B ハンナの悲しみの祈り(1:9-11)

#### C ハンナとエリの悲しみの会話(1:12-18)

#### X サムエルの誕生(1:19-23)

#### C' ハンナとエリの喜びの会話(1:24-28)

#### B' ハンナの喜びの祈り(2:1-10)

#### A' エルカナ、ラマの家に帰るがサムエルはシロにとどまる(2:11)

次はエリによこしまな息子たちのストーリーである。サムエルと彼らとの対比が強調される(概略1.2)。

### ■概略1.2 エリによこしまな息子たち(第一サムエル記2:12-26)

#### A 導入:エリの息子たちは主を知らない(2:12)

#### B エリの息子たちの悪行(2:13-17)

#### C サムエル、主に仕える(2:18)

#### X ハンナ、さらに子を身ごもる(2:19-21b)

#### C' サムエル、主の前に成長する(2:21c)

#### B' エリの息子たちの悪行(2:22-25)

#### A' 結び:サムエル、主の好意を受けて成長する(2:26)

構造を見ているとき、現在見ている構造を包み込むような、より大きな構造があることに気付くことがある。サムエル記では、隣り合った二つのストーリーをつなぎ合わせる構造が見つかることが多い。このような構造は、一方が土台、もう一方が住居部分という建物の構造にたとえることができるだろう。

次に第一サムエル記2:1-36、3:1-4:1a、4:1b-18に現れた緻密な構造を見てみよう。

### ■概略1.3 第一サムエル記2:1-36の文学的一貫性

- A ハンナの預言:主に油注がれた者に言及して終わる(2:1-10)
- B 主の前でのサムエルの働き(2:11)
- C エリの息子たちの罪(2:12-17)
- D 主の前でのサムエルの働き(2:18-19)
  - X エリ、サムエルの両親を祝福する(2:20-21a)
- D' 主の前でのサムエルの成長(2:21b)
- C' エリの息子たちの罪(2:22-25)
- B' 主の前でのサムエルの成長(2:26)
- A' 神の人の預言:主に油注がれた者に言及して終わる(2:27-36)

### ■概略1.4 第一サムエル記3:1-4:1aの文学的一貫性

- A サムエル、しもべとして主の前でエリに仕える(1a)
- B 主のことばはまれにしかない(1b-c)
- C エリの目がかすんで見えなくなる(2)
- D 主がサムエルを3度呼ぶ(3-9)
  - a サムエルは主の宮で寝ていた(3)
  - b 主の第1の呼びかけ(4-5)
  - c 主の第2の呼びかけ(6)
    - x サムエルはまだ、主を知らない(7)
  - c' 主の第3の呼びかけ(8)
  - b' エリ、サムエルに答える方法を教える(9a)
  - a' サムエル、自分の所で寝る(9b)
  - X 主がサムエルに現れる(10-15)
- D' エリ、サムエルを呼ぶ(16-18)
  - a サムエル、エリに啓示を告げるのを恐れる(15c-16)
  - b 「主の言葉はどうであったか?」(17a)
  - c 「私に隠さないでくれ!」(17b)
    - x 「神がおまえを幾重にも罰せられるように」(17c)
  - c' 「おまえが一つでも隠すなら」(17d)
  - b' 「主がお告げになったことばのうち」(17e)
  - a' サムエル、エリにすべてを告げる(18)
- C' サムエルは成長した(19a)
- B' 主のことばが再び与えられる(19b-21)
- A' 預言者サムエルのことばが全イスラエルに行き渡る(4:1a)

4:1b-18の前に第一サムエル記4:1b-6:19を見てみよう。契約の箱はイスラエルに対する神の臨在の象徴である。その臨在の力のすさまじさにペリシテ人もイスラエル人も押しつぶされてしまう。

### ■概略1.5 主の箱の臨在(第一サムエル記4:1-6:19)

- A 約四千人のイスラエル人の戦死(4:1b-2)
- B 敗北:神の箱奪われる:エリの息子たちの死(4:5-11)
- C 神の箱が奪われた結末:エリ、首を折って死ぬ(4:12-22)
- C' 神の箱を奪った結末:ダゴン、首を切られて「死ぬ」(5:1-12)
- B' 信仰の勝利:神の箱が戻る(6:1-18)
- A' 多数のイスラエル人が主に打たれて死ぬ(6:19)

## ■概略1.5.1 第一サムエル記4:1b-18の文学的一貫性

導入:イスラエルの敗北:四千人が戦死(1b-2)

A 人々陣営に戻る:「シロから契約の箱を持ってこよう」(3)

B ケルビムに座しておられる主の契約の箱がシロから到着する  
エリの息子たちの名が言及される(4)

C イスラエルの大歓声(5)

D ペリシテ人いぶかる「あの歓声は何だろう」(6a)

E ペリシテ人、主の契約の箱のことを知る:恐れ(6b)

F ペリシテ人の長い語り:自らを鼓舞する(7-9)

G イスラエルの損失とストーリーの一区切りの終わり  
ホフニとピネハスの死が特記される(10-11)

A' ベニヤミン人、戦場からシロに走ってくる(12)

B' エリがシロの道のそばの席で神の箱を心配して見張る(13a)

C' 知らせの者、敗戦を知らせ、町中こぞって泣き叫ぶ(13b)

D' エリ、泣き叫ぶ声を聞く「この騒々しい声は何だ」(14a)

E' 知らせの者、大急ぎでエリに知らせる(14b)

F' エリの年齢と盲目さ(15)

G' 知らせの者、言葉どおりすべてを告げる

「ホフニとピネハスと神の箱が失われた」(16-17)

結び:エリの死とイスラエルをさばいた期間(18)



## II. サウルの支配・罪・神の拒絶(第一サムエル記8-15)

2番目の大きなストーリーのまとめは、サウルの王国の確立、サウルの罪、サウルが王位からしりぞけられるストーリーだ(概略2)。主がサウルをイスラエルの王として選んで始まり(A)、主がサウルをイスラエルの王位からしりぞけて終わる(A')。この箇所は「明-暗」という形式の構造を持つ。サウルについての良い内容で始まり(アモン人に対する大勝利が頂点)、サウルの罪と神による拒絶で終わる。対称的な構造によってサウルの歩みの暗転がはっきりする。中心にサムエルの送別の言葉が置かれる。

### ■概略2 サウルの支配と神による拒絶(第一サムエル記8-15)

#### A イスラエルがラマで王を求め、神がサウルを選ぶ(8:1-10:16)

- イスラエル人、ラマでサムエルに会う
- 神がサウルを選び、サムエルが宣言する
- サウル、自分が最も小さい者で、選びが不適切だと述べる(9:21)
- 神はサウルの心を変えて新しくされた(10:9)
- サムエルがギルガルでいけにえをささげると約束する(10:8)
- サウル、ギブアに行くが家には行かない(10:9-16)

#### B サウルがくじによってミツパで取り分けられる(10:17-27)

- くじがサムエルのために神のみこころを告げ、サウルを王とする

#### C 戦いの用意とアモン人に対する勝利(11:1-13)

- サウル、大軍を集める:330,000の兵士
- サウル、1くびきの牛を切り分けて徴兵に成功する
- 七日間待って勝利する

#### X サムエルの送別の言葉(11:14-13:1)

#### C' ベリシテ人に対する戦いの用意(13:2-15)

- サウル、惨めなほどわずかな軍勢しか集められない:600名の兵士
- 無断でいけにえをささげて徴兵に失敗する
- 七日間待てずに神に責められる

#### B' サウル、くじによってミクマスでかろうじて勝利する(13:16-14:52)

- くじはサウルに神のみこころを告げない:
- ヨナタンは実際には罪に定められるべきではなく英雄であった

#### A' 神がサウルを王位からしりぞける:アマレクとの戦いにおけるサウルの罪(15:1-35)

- サムエル、ラマに戻り、二度とサウルを見ない
- 神がサウルを王位からしりぞけたことをサムエルが告げる
- サウル、自分を小さい者と思う(15:17)
- サウル、去ろうとするサムエルの衣のすそをつかんで裂く(15:27)
- サウル、神に逆らってギルガルでいけにえをささげる(15:21)
- サウル、ギブアの家へ戻る

第一サムエル記8章にある四つの対話は目立ったキアスマスだ。それぞれの対話において話す者と聞く者が交互に反転している(概略2.1)。

### ■概略2.1 第一サムエル記8:5-22)

#### A 民、サムエルに語る(5)

#### B サムエル、主に語る(6)

#### C 主、サムエルに語る(7-9)

#### D サムエル、民に語る(10-18)

#### D 民、サムエルに語る(19-20)

#### C' サムエル、主に語る(21)

#### B' 主、サムエルに語る(22a)

#### A' サムエル、民に語る(22b)

キアスマスの中心はサムエルと民の対比である。読者の期待に反して、主と民が直接対立する図式ではない。しかし、会話のキアスマスの中で次のことが明らかだ。つまり、主はイスラエルの民の願いを好ましいとは思っておられないが、それをすぐに否定されない。ただ黙って民の意志をくつがえされる。

第一サムエル記12章は四つの部分に分かれる。12:13が中心部である。

### ■概略2.2 第一サムエル記12:1-25

- A サムエル、自らの契約への忠実を民の前で主張する  
主と主に油注がれた者とが証人となる(1-5)
- B サムエル、出エジプトと士師の時代の神の義による支配の歴史を語る(6-12)  
X サムエル、民のわがままで反逆的な欲求を神が許したことを宣言する(13)
- B' サムエル、従順による契約の祝福と、反逆による契約の呪いを語るが、  
雷と雨の奇跡により、呪いの側面が強調される(14-19)
- A' サムエル、民と新しい王に契約の忠実を守るよう告げる(20-25)

サウルの滅びのストーリーは13章から15章でまとめて強調されるが、その後もサウルは散発的に登場する。ダビデの王権の確立のストーリーとサウルの滅びのストーリーはからみ合ったまま、第一サムエル記の終わりまで続く(16:1-28:2)。13章から15章までの箇所は、それより前の部分と後の部分からは独立しているのだ。

8章から12章において、国の危機を乗り越えた後のサウルの支配権が目玉を引く。サウルの滅びが始まる13章は、南部イスラエル出身の王の支配を告げる慣用表現で始まり、15章がサムエルとサウルの決裂で終わっている。次いで16章は、ベツレヘムでエッサイの子に油を注ぎ、サウルの代わりの王とせよ、というサムエルに対する神の命令で始まる。

以上のように第一サムエル記13章から15章までのストーリーは、8章から12章までと16章以降とを橋渡しする重要な役割を果たしている。13章から15章までは、次のようなキアスマスである。

### ■概略2.3 第一サムエル記13-15

- A サウル、サムエルに叱責される(13:1-15)
- B サウル、ペリシテ人と戦う(13:16-14:23)  
X サウル、ヨナタンを呪う(14:24-46)
- B' サウル、さらに戦う(14:47-52)
- A' サウル、王位からしりぞけられる(15:1-35)

サウルに対するサムエルの最初の叱責(A)は、最終的に神がサウルをしりぞけたこと(A')と並行する。また、ペリシテ人に対するサウルの勝利(B)は、ほかのさまざまな敵(ペリシテ人を含む)への勝利(B')と並行する。そして、サウルが自分の初子であり後継ぎであるヨナタンを処刑しようとする箇所(X)が、13章から15章までのストーリーの中心である。

イスラエル人とペリシテ人とが交互に恐れおののく箇所(13:5-7、14:15-23)において、両者の立場の逆転がはっきりする。また、始まりと終わりから中心に向かって展開するストーリーの中で、サウルとヨナタンの態度と行いが非常に対照的に描かれる。

### ■概略2.4 第一サムエル記13:5-14:23

- A ペリシテ人がベテ・アベンの東に陣を敷く(13:5)
- B イスラエル人、困窮する(13:6a)
- C イスラエル人、ほら穴や奥まった所に隠れる(13:6c)
- D イスラエル人、ヨルダン川を越えて逃げる(13:7a)
- E サウルの民、震え上がる(13:7c)  
F 失敗の頂点: サウルの薄い信仰がサムエルに叱責される  
F' 回復の契機: ヨナタンが信仰によってペリシテの軍勢を破る
- E' ペリシテ人、震え上がる(14:15、19-20)
- D' ペリシテ側のイスラエル人、サウルの側に立つ(14:21)
- C' 隠れていたイスラエル人、出てきて戦いに加わる(14:22)
- B' 主がイスラエルを救う(14:23a)
- A' 戦いがベテ・アベンに(西方へ)移る(14:23b)



14:24b-35の箇所のはじめの部分にはキアスマスがある。

■概略2.5 第一サムエル記14:24b-35

A サウルが民に呪いの誓いをさせる(14:24b)

B 「民はだれも食物を味見もしなかった」(14:24c)

X 試み: 森には蜜があった(14:25)

B' 「だれもそれを手につけて口に入れる者はなかった」(14:26c)

A' 「民は誓いを恐れていたからである」(14:26d)

第一サムエル記14:23b-35の文脈全体もキアスマスである。

■概略2.6 第一サムエル記14:23b-35

A サウルが禁令を発する(14:24)

B 軍勢: 従順(14:25-26)

C ヨナタン: 知らずに不従順(14:27)

X サウルの誓い(14:28)

C' ヨナタン: 知りながら不従順(14:29-30)

B' 軍勢: 律法違反(14:32-33d)

A' サウルが祭壇を築く(14:33e-35)

### III. サウルの王宮におけるダビデ(第一サムエル記16-20)

3番目の大きなストーリーのまとめは、若い頃のダビデが名を上げてサウルの王宮に入るまでである(概略3)。その前の部分(8章-12章)と似ており、「明-暗」形式の構造を持つ。サムエルによるダビデへの油注ぎ、ゴリアテの撃破、サウルの王宮での名声、ヨナタンとの友情に始まるストーリーだ。中心はその後にくる。前半(A, B, C)と後半(C', B', A')がキアスマスによって並行し、ダビデの立場が逆転したことを示す。ダビデに対するサウルの殺意に満ちた嫉妬と、実際にダビデを殺そうとする行為とが詳しく語られる。構造は他の部分と似ている。

#### ■概略3 サウルの王宮におけるダビデ(第一サムエル記16-20)

A サムエルがダビデに油を注ぐためにラマからベツレヘムへ行く:

サウルに殺されることを恐れる(16:1-13)

B 喜ばしいこと:悪い霊におびえるサウルのためにダビデが立琴をひく(16:14-23)

-結末:サウルがダビデを愛する

C ダビデがゴリアテに勝つ(17:1-58)

-ゴリアテが槍でダビデを殺そうと向かってくる

-ダビデ、ペリシテの巨人を倒し、その首を戦勝記念とする

-ゴリアテの殺意が挫折する

X サウルの王宮におけるダビデの成功(18:1-6)

-ヨナタン、ダビデを愛する:民はダビデを喜ぶ

C' サウルがダビデの勝利をたたえる民の歌に嫉妬する(18:7-30)

-サウルが槍でダビデを殺そうとする

-ダビデ、ペリシテ人を殺して陽の皮を持ち帰り、ミカルの花嫁料とする

-サウル、ペリシテ人を用いてダビデを殺そうと謀るが挫折する

B' 悲しむべきこと:悪い霊におびえるサウルのためにダビデが立琴をひく(19:1-17)

-結末:サウルがダビデに嫉妬し刺客を送り込む:ミカルがダビデを救う

A' ダビデがサウルの殺意からラマのサムエルのもとに逃れる:

サムエルとヨナタンがダビデを救う:

ダビデ、サウルの王宮へは二度と戻らず、逃亡者となる(19:18-20:42)

ダビデとゴリアテのストーリーは、聖書(少なくとも第一サムエル記)の中で最も有名で愛されるストーリーのひとつだ。8章~15章に類似のストーリーがあり、両者は下記のように並行している。

・サウルに対するサムエルの油注ぎ(10:1)~ナハシュとアモン人に対するサウルの敗北(11:1-11)

・ダビデに対するサムエルの油注ぎ(16:13)~ゴリアテとペリシテ人に対するダビデの勝利(16:13)

これらのストーリーは時間順に記述されているわけではない。しかし両者に共通しているのは、勇敢で決断力と軍事的才能に恵まれた王が立てられてすぐにイスラエルに勝利をもたらす、という点である。

ペリシテ人とイスラエル人は谷をはさんで対峙する。その光景が目には浮かぶようだ。両方の陣営からそれぞれの軍勢を代表して男が一人進み出る。ペリシテ人の陣営からゴリアテ(17:4)が、イスラエルの陣営からダビデ(17:40b)が現れる。それぞれの武装が非常に詳しく描写され、その違いは明らかだ(17:5-7; 17:38-40a)。ゴリアテはイスラエルを侮辱し(17:8-10)、イスラエルの陣営には恐れが起こる(17:11)。ダビデはイスラエルの恐れを取り除いて平静をもたらす(17:31-35)、ゴリアテのあざけりに答える(17:36-37)。

#### ■概略3.1 ダビデとゴリアテ(第一サムエル記17:1-40b)

A ゴリアテが進み出る(4)

B ゴリアテの武装(5-7)

C ゴリアテのあざけり(8-10)

D イスラエルの恐れ(11)

X ダビデが戦場に現れる(12-31)

D' 「恐れてはならない」(32)

C' ダビデの答え(33-37)

B' ダビデの武装(38-40a)

A' ダビデが進み出る(40b)

ストーリーを中断するようにダビデが登場する場面がこのキアスマスの中心だ(12-31)。イスラエルの戦士たちのあきらめ(25)とダビデの憤慨(26)の対比は興味深い。ゴリアテのことをイスラエル人は単に「あの男」と呼び、ダビデは「この割礼を受けていないペリシテ人」と呼ぶ。イスラエル人は、ゴリアテの行いを「イスラエルへの侮辱」と思っていたが、ダビデは「生ける神の軍勢への侮辱」と認識していた。さらにイスラエル人は、ゴリアテを殺すことを「あれを殺す」と単純に言うが、ダビデは「このペリシテ人を打って、イスラエルのそしりをすすぐ」と表現する。

次に、第一サムエル記18:12-30のストーリーを見てみよう。ここでは、サウル王のうそ(18:22)が中心だ。サウルはダビデを殺そうと謀る。次の並行に注意したい。

#### ダビデの固辞(18-19)

ペリシテ人を使うサウルの策略(17:21)

ペリシテ人を使うサウルの策略(17:23-24)

義理の息子になるよう勧めるサウルの招き(18:26)

始めと終わりから中心に向かうこのストーリーの流れは強調表現の一種である。

### ■概略3.2 サウルの裏切り(第一サムエル記18:12-30)

#### A ダビデの成功を見たサウルの恐れ(12-16)

—主はダビデとともにおられる

—全イスラエルとユダがダビデを愛した

#### B サウルの約束:メラブを妻として与える(17ab)

C サウルの策略:ペリシテ人にダビデを殺させるため(17c)

D ダビデの固辞:サウルの義理の息子にはならない(18-19)

E ダビデへのミカルの愛:サウルの承認(20)

F サウルの2番目の策略:ペリシテ人にダビデを殺させよう(21)

X **ダビデに対するサウルの偽善の言葉(22)**

F' サウルの2番目の策略の反復:ペリシテ人にダビデを殺させよう(23-24)

E' ミカルと結婚するための花嫁料(25a)

D' ダビデの熱意:サウルの義理の息子になりたい(25b-26a)

C' サウルの策略が挫折する:ダビデと部下200人のペリシテ人を殺す(26b-27b)

B' サウルの承認:ダビデとミカルの結婚(27c)

#### A' ダビデの成功を見たサウルの恐れ(28-30)

—サウル、ダビデとともに神がおられることを知る

—ミカル、ダビデを愛する

第一サムエル記18:20-26aの文学的構造はキアスマスである。「C-C'」の並行関係が拮抗して、ダビデが王の義理の息子になるかどうかという状況を作り出している。サウルはダビデに娘との結婚を願い、ダビデは言い寄られる側、という関係になっている。

### ■概略3.2.1 第一サムエル記18:20-26a

a サウル、ダビデに対するミカルの愛を都合よく思う(20)

b サウル、ダビデがペリシテ人の手に落ちるように謀る(21)

c サウル、ダビデに告げる(22-23a)

c' **ダビデ、サウルに告げる(23b-24)**

b' サウル、ダビデがペリシテ人の手に落ちるように謀る(25)

a' **ダビデ、王の義理の息子になることを喜ぶ(26a)**

18章において、メラブとミカルは登場するたびに「サウルの娘」と称される(17; 19-20; 27-28)。どちらの娘と結婚するにしても、王の家と関係を持つという政治的性質の結婚になることは免れない。いったん結婚が成立すればサウル(またはヨナタン)が死んだ場合、イスラエルにおけるダビデの王座は確かなものになる。

ダビデに対するミカルの「愛」(20; 28)は、ヨナタンの愛(1; 3)と並行している。ここでいわれる「愛」は、両者において契約的ニュアンスを含むことは間違いない。この兄妹は明らかに父よりも父のライバルを愛し、忠実であろうとする。第一サムエル記18章から20章までに現れるストーリーの並行関係は比較することができる。

サウルとダビデは、両方ともミカルとの結婚に関して「ちょうどよい」と思う(20; 26)。理由はそれぞれ異なる。エジプトのパロにとってモーセが「落とし穴」となった(出エジプト10:7)ように、ミカルがダビデにとって「落とし穴」になることを望む(21)。サウルが求める花嫁料はペリシテ人の陽の皮百であり、ダビデはそれを成し遂げられないはずであった(25)。しかしダビデは2倍の数の陽の皮を持ち帰った(27)ため、皮肉なことにサウルの策略は、ダビデに「2番目の花嫁候補」(21)を与えることになった。

サウルは、ミカルを利用した策略を確実なものとするため、わざわざ家来に告げさせてダビデに言う(22)。サウルの命令とは無関係の、家来による自発的な情報提供であることを印象づけるためにそれは「ひそかに」行なわれた。家来たちは、民の実際の反応(16)に調子を合わせてダビデに対する忠誠を強調した。

ダビデの反応(23)は、彼の卑しい生まれ(18)を再び強調する。「ことばに分別がある(16:18)」ことが示される。この箇所にはヘブル語による言葉遊びが含まれている。さらにダビデは自分が「貧しい」ことに言及するが、これは後に預言者ナタンによってダビデを責める言葉として繰り返される(第二サムエル記12:1-4)。

卑しい出自であることを理由にダビデが結婚を辞退しようとするのをサウルは許さない。その一方で、ミカルとの結婚の条件としてさりげなく「ペリシテ人の陽の皮百だけ」という要求を持ち出す(25)。ここで使われているヘブル語の「モハール(mo'har)」は創世記34:12、出エジプト記22:15で使われている単語であり、花婿から花嫁の父親に支払われる花嫁料を指す。

サウルはペリシテ人百人を殺すことを要求するとき、もちろんダビデがペリシテ人に殺されることを望んでいる。同時に「王の敵に復讐する(18:25)」という一石二鳥もくろんだ(14:24; 士師15:7; 16:28はペリシテ人への復讐に言及した例)。しかし皮肉なことにダビデが「王の敵」となってしまった(18:29; 19:17; 20:13; 24:4,19)。

#### IV. ダビデの逃亡(第一サムエル記21-31)

4番目の大きなストーリーのまとめは、ダビデの政治的逃亡者としての生活であり(概略4)、七つの部分からなるキアスマスである。記者は、ダビデが神のみどころにかなう者であることを明らかにするためにじっくりとストーリーを展開する。神がサウルの狂った嫉妬からダビデを守り続けてくださることを詳しく説明するのだ。21章から31章は、第一および第二サムエル記全体の中心部にあたる。サウルがダビデを殺そうと謀ることから始まり、最終的にサウルが死んで終わり、ダビデにイスラエルの王権が明け渡される。

##### ■概略4 ダビデの政治的逃亡者としての生活(第一サムエル記21-31)

###### A ダビデ逃亡する: サウルがアヒメレクとその家族を殺す(21:1-22:23)

- ダビデが主の大祭司から助けと主のみどころを求める(22:15と対称的)
- 主の祭司が腹を空かせたダビデとその一行に主にそなえたパンを与える
- ダビデが、ゴリアテの首をはねたときの剣を与えられる
- イスラエル人、次第にダビデのもとに集まる
- ダビデ、ガテの王アキシュから逃れる

###### B ダビデ、ユダのケイラの町をペリシテ人の手から守る(23:1-18)

###### C ジフ人の裏切り: ダビデ、サウルの命に手を下さない(23:19-24:22[23:19-24:23])

- 始まり:ジフ人がギブアのサウルの家に行って告げる:  
「ダビデがエシモンの南、ハキラの丘の要塞に隠れている」
- ダビデ、サウルを殺さずに上着のすそだけを切り取る
- サウルは「これはあなたの声なのか。我が子ダビデよ。」と言った(24:16-17)  
サウルが自分の罪を認めて家に帰る
- 終わり:サウルが家に帰り、ダビデは要塞に戻る

###### X サムエルの死、ダビデとアビガイル(25:1-44)

- アビガイル、将来のダビデの王権を語る

###### C' ジフ人の裏切り: ダビデ、サウルの命に手を下さない(26:1-25)

- 始まり:ジフ人がギブアのサウルの家に行って告げる:  
「ダビデがエシモンの東、ハキラの丘に隠れている」
- ダビデ、サウルを殺さずに槍と水差しだけを取る
- サウルは「これはあなたの声なのか。我が子ダビデよ。」と言った(26:17)  
サウルが自分の罪を認めて家に帰る
- 終わり:ダビデが立ち去り、サウルは家に帰る

###### B' ダビデ、ペリシテ人を「守り」ながらユダの町をペリシテ人から守る(27:1-12)

###### A' 主がサウルとその子らをギルボアの戦いで殺す(28:1-31:13)

- サウル、主のみどころを求めるが失敗する(過去に祭司の一族を殺した)
- サウル、霊媒師によって事を探ろうとする(律法で禁じられた行い)
- ダビデ、エブヤタルにより主のみどころを知る(エブヤタルはサウルが殺した祭司の一族の生き残り)
- 霊媒師、サウルに食事を与える
- サウル、ペリシテ人の剣によって首をはねられる
- サウルの軍勢が散らされる:イスラエル人、ヨルダン川東方に逃げる
- ダビデ、ガテの王アキシュとペリシテ人のもとを去る

この「ダビデの逃亡(第一サムエル記21-31)」は、第一および第二サムエル記全体の中心である。ダビデの最初の逃亡で始まり、ノブの祭司たちが殺されるなどのストーリーが組み合わせられて一定の構造をなす。終わりは、ギルボアの戦いでサウルの死に関連した、驚くほど長い陳述である。

アビガイルがこの箇所を中心であることは興味深い。ストーリーは、一見したところ中心になりそうもない。クライマックスや折り返し点には見えないのだが、次の点を考慮すればこの箇所が中心だといえる。

##### 1.サムエルの死で始まる(25:1)

サムエルの死は、当然ながらサムエル記の非常に重要な折り返し点となる。

##### 2.主要テーマが語られている

アビガイルの注目すべき語りの中に、サムエル記全体のいくつかの主要テーマが含まれている。

- a.ダビデ自身が復讐を行なうことが妨げられる(25:26, 31)
- b.ダビデは潔白である(それはダビデの一生の間続く 25:28)
- c.神の祝福と御手の守り(25:29)
- d.ダビデをイスラエルの王とし、王座を永遠に立てる神のみどころ(25:28, 31)



第一サムエル記25章は、それ自体がこの4番目の大きなまとまりの中心である。また、単に中心を指し示すだけでなく、前後の24章と26章とを並行させる折り返し点としても機能している。25章はダビデの友サムエルの死で始まる。終わりには、サウルがいったんだビデに与えたミカルを他人の嫁にしまう、つまり、ダビデを死んだ者とみなすのだ(25:44)。

したがって、25章を「ダビデの生涯の最大の苦難の折り返し点」として読むことが可能だ。しかし同時にダビデは賢い妻(アビガイル)を獲得している。アビガイルはダビデを説得して大悪党ナバルへの攻撃を思いとどまらせた。

24章と26章でサウルは大きく扱われているのに、両者には含まれた25章では、サウルは最後の1節にしか登場しない。あたかもナバルが、サウルの分身として象徴的に登場しているかのようだ。

#### ■概略4.1 第一サムエル記25:1-44の構造

- A サムエルが死ぬ(1a)
- B 逃亡中のダビデ、富むナバルと美しい妻アビガイルの住居の近くに来る(1b-3)
- C ナバルに助けを求めて無礼な拒絶に会い、復讐の用意をする(4-13)
- D アビガイル、ダビデのために食物を用意する(14-19)
- X **ダビデ、アビガイルに会う(20-35)**
- D' アビガイル、食物をむさぼり食うナバルを見る(36-38)
- C' ナバルの死を聞き、ダビデは主の復讐をたたえる(39a)
- B' 逃亡中のダビデ、美しいアビガイルを第二の妻とする(39b-43)
- A' サウルがダビデを死人のようにみなす(44)

#### ■概略4.2 ダビデの逃亡生活の前半部(第一サムエル記21-22)

- A ノブの祭司アヒメレク、ダビデを助ける:エドム人ドエグが見る(21:1-9[21:2-10])
- B ダビデ、ユダから逃れてガテに行く(21:10-15[21:11-16])
- C ダビデ、アドラムのほら穴に隠れる:家族が集まる(22:1)
- X **四百人がダビデの集団に加わる(22:2)**
- C' ダビデ、両親をモアブに移す(22:3-4)
- B' ダビデ、ユダに戻る:ハレテの森(22:5)
- A' ノブの祭司アヒメレクと家族、エドム人ドエグに裏切られる:  
サウルがドエグに彼らを殺させ、エブヤタルが生き残る(22:6-23)

第一サムエル記22:6-23(A')は、次のような二重の機能を持つ。

1. 祭司エリの家を絶やすという主の約束(第一列王記2:26-27)の成就
2. 神にしりぞけられたサウル王の祭司職への侮りと、選ばれた王ダビデの祭司(神のみこころの仲介者)を敬う心の対比

#### ■概略4.2.1 第一サムエル記22:6-23の構造

- a サウル、家来を叱咤する(6-8)
- b ドエグ、アヒメレクのことを告げる(9-10)
- X **サウル、アヒメレクと一族を罪に定める(11-17)**
- b' ドエグ、アヒメレクと一族を殺す(18-19)
- a' ダビデ、アヒメレクの息子を守る(20-23)

#### ■概略4.3 サウルの死(第一サムエル記28-31)

- A 導入:戦いの準備:背景(28:1-4)
- B エン・ドルの霊媒の託宣:サウルと息子たち、翌日死ぬ(28:5-25)
- C ダビデ、ツィケラグに戻る:家族が捕虜にされる(29:1-30:6)
- X **アマレクに対する勝利:主がダビデの勝利を約束する(30:7-25)**
- C' ダビデ、ツィケラグに戻る:家族を救出する(30:26-31)
- B' エン・ドルの霊媒の託宣が成就:サウルと息子たち、死ぬ(31:1-7)
- A' 結び:戦いの後:サウルと息子たちの遺体を取り戻す(31:8-13)



## V. ダビデの王座の確立とサウルの家族への誠実(第二サムエル記1-8)

サムエル記の5番目の大きなストーリーのまとめは、サウルの死後ダビデが全イスラエルの王となったことを語る(概略5)。主なテーマは、サウルの家に対するダビデのあわれみといつくしみである。全体は大きく二つの部分に分かれ、それぞれはさらに七つの部分からなるキアスマスだ。最初の部分はユダの上に臨むダビデの王権とサウルの家の者の死の嘆きを語る。次の部分では、ダビデがどのようにして全イスラエルの王となったかを述べ、ダビデが成功して王権を確立するまでを描く。

### ■概略5 ダビデがイスラエルの王となる(第二サムエル記1-8)

#### [パート1 ダビデ、ユダの王となる(第二サムエル記1-4)]

- A ダビデ、イスラエルの王サウルを殺したと告白した者を殺す(1:1-16)
- B サウルとヨナタンを惜しむダビデの嘆き(1:17-27)
  - C ダビデ、ユダの王となりサムエルを葬った人々に謝意を表す(2:1-7)
    - X 北と南の対立:ダビデの家栄える:ダビデの息子たち(2:8-3:5)
  - C' アブネル、ダビデをイスラエルの王とするがダビデの知らない所で殺される(3:6-27)
- B' アブネルを惜しむダビデの嘆き(3:28-39)
- A' ダビデ、サウルの息子イシュ・ボシェテを殺したと告白した者を殺す(4:1-12)

#### [パート2 ダビデ、全イスラエルに王権を確立する(第二サムエル記5-8)]

- A ダビデ、イスラエルの王となる:要約:エルサレム攻略(5:1-16)
  - B ペリシテ人に対する勝利(5:17-25)
    - C ダビデ、契約の箱をエルサレムに運び、主の前で喜び踊る(6:1-23)
      - X ダビデの王国が永遠に立つという約束(7:1-17)
    - C' ダビデ、契約の箱の前で主に喜びと感謝の祈りをささげる(7:18-29)
  - B' ペリシテ人に対する勝利(8:1-14)
  - A' ダビデの支配についての要約(8:15-18)

第二サムエル記の始まりは、第一サムエル記の終わりにあたる。サウル王とその後継ぎになるはずだった息子ヨナタンの死のストーリーだ。しかし第一サムエル記31章が実際のできごとを描写しているのに対し、第二サムエル記1:1-16ではアマレク人の報告という形で間接的にそれが語られる。この部分のキアスマスを見てみよう。

### ■概略5.1 第二サムエル記の構造(第二サムエル記1:1-16)

- A ダビデ、アマレク人を打つ(1)
- B ダビデ、アマレク人に問う(2-5)
  - C アマレク人、ダビデに答える(6-10)
  - C' ダビデと家来、アマレク人に答える(11-12)
- B' ダビデ、アマレク人に再び問う(13-14)
- A' ダビデ、アマレク人を打つ(15-16)

第3章の構造は興味深い。アブネルが死ぬ前、死ぬ時、死んだ後のすべてを含むストーリーだ。中心は30節の挿入句である。ここでヨアブがなぜ北王国の指導者を殺す必要があったかという理由が語られる。前半と後半は同じ形のアウトラインを持つ。

### ■概略5.2 第二サムエル記3:22-39

- A ヨアブ、アブネルを殺す(22-27)
- B ダビデ、アブネルの死に責任がないことを宣言する(28)
  - C ダビデ、ヨアブをのろう(29)
    - X 挿入句(30)
- A' ダビデ、アブネルの死をいたむ(31-35)
  - B' ダビデがアブネルの死に責任がないことを民が認める(36-37)
  - C' ダビデ、アブネルをたたえ、ヨアブをのろう(38-39)

## VI. ダビデの罪とその結末(第二サムエル記9-20)

サムエル記の6番目の大きなストーリーのまとめ(ダビデ王朝の長い歴史)は、ダビデがバテ・シェバについて犯した罪とその恐るべき結末が述べられる(概略6)。読者がストーリーの意味を理解できるように、背景となるメフィボシェテの短いストーリーがはじめに述べられる(第二サムエル記9)。ストーリーは大きく二つのキアスマスに分かれ、どちらも前半七つ、後半七つのアウトラインを持つキアスマスである。キアスマスは、最初がダビデの罪、2番目がその結果、という構成だ。最初のキアスマスの文脈ではアモン人との戦いが、また2番目のキアスマスの文脈では、ヨルダン川東方でのダビデと息子との戦いが述べられる。

### ■概略6 ダビデの罪とその結果(第二サムエル記9-20)

#### [パート1 ダビデの罪(第二サムエル記9:1-12:31)]

導入:メフィボシェテとツィバ(9:1-13)

a ダビデ、サウルの家の生き残りに恵みを施そうとする(1)

b ダビデ、サウルの家のしもべツィバに語る(2-5)

x ダビデ、メフィボシェテへの好意を示す(6-8)

b' ダビデ、サウルの家のしもべツィバに語る(9-11a)

a' ダビデ、サウルの家の生き残りに恵みを施す(11b-13)

A アモン人との戦い(10:1-19)

B ダビデがバテ・シェバを見て罪を犯す:バテ・シェバ身ごもる(11:1-5)

C ダビデ、自らの罪を隠す(11:6-27)

X 神、ダビデの罪を明らかにする(12:1-12)

C' ダビデ、自らの罪を認める(12:13-15a)

B' バテ・シェバの子死ぬ:2番目の子ソロモンは生きる(12:15b-25)

A' アモン人に対する勝利(12:26-31)

#### [パート2 ダビデの罪の結果(第二サムエル記13:1-20:22)]

A アブシャロムの反乱(13:1-15:16)

-ヨアブと知恵のある女、協力して反逆者アブシャロムを助ける

B ダビデ、エルサレムを逃れる(15:17-17:29)

-シムイ、ダビデをのろう:アビシャイ、シムイを殺すようダビデを促す:

ダビデ、アビシャイを強いさめる

-メフィボシェテ、ダビデの苦境を無視する:

ツィバとバルジライ、助けを申し出る

C ダビデ、マハナイムの門にとどまり、戦況報告を待つ(18:1-5)

X アブシャロム、敗北して死ぬ(18:6-18)

C' ダビデ、マハナイムの門の近くでアブシャロムの死を知る:

アブシャロムの死を嘆き悲しむ(18:19-19:8c[18:19-19:9c])

B' ダビデ、エルサレムに戻る(19:8d-43[19:9d-44])

-シムイ、あわれみを請う:アビシャイ、シムイを殺すようダビデを促す:

ダビデ、アビシャイを強いさめる

-メフィボシェテ、非難される:ダビデ、ツィバとバルジライに謝意を表す

A' シェバの反乱(20:1-22)

-ヨアブと知恵のある女、協力して反逆者シェバを殺す

-結び:ダビデの王宮の役職者(20:23-26)

a シェバ、ダビデを離れる(1-2)

b ダビデ、シェバに反撃を開始する(3-7)

x ヨアブ、ライバルのアマサを殺す(8-13)

b' アベル・ベテ・マアカの知恵のある女がシェバを討つ(14-22a)

a' ヨアブ、ダビデのもとに帰る(22b)

これらの二つのパートは互いに呼応してダビデにまつわる悲劇を描いている。二つの戦争はいずれもヨルダン川東方で行なわれた。ただし、2番目の戦争は内戦だったという違いがある。また、両者においてダビデは王宮にとどまり、前線からの報告を待つ(両者とも悲報であった)。両者においてヨアブがダビデの軍団を指揮して勝利を収める。ただし2番目の戦争では、不幸なことにダビデ自身の息子が死ぬ。両者においてダビデは、ヨアブが命令を実行したかどうか報告を待ちわびる。つまり、最初はウリヤについて、2番目はアブシャロムについてである。最初の戦争でダビデは、バテ・シェバの罪のない夫ウリヤを殺すようヨアブに命じる(ダビデを満足させるためにヨアブはこれを実行する)。2番目の戦争でダビデは、真の逆逆者であるアブシャロムを救うようヨアブに命じる(この回ではヨアブは従わず、ダビデは取り乱す)。両者においてダビデは、息子たちが失われたことを嘆く(アムノン、バテ・シェバの長子、アブシャロム)。また、両者においてイスラエルの指導者が姦淫の罪を犯す。最初はダビデがウリヤの妻と姦淫の罪を犯し、2番目はアブシャロムがダビデのそばめと姦淫の罪を犯す。

ダビデが罪を犯す箇所の大略を見てみよう。10章から12章までの構造は長く複雑だが、その中でも11章は独立している。11:1と12:26-31を見ると、ダビデ、ヨアブ、アモン人、アモン人の王ラバ、そしてエルサレムに関連するストーリーには、複雑ではあるが一定の構造があることがわかる。

### ■概略6.1 ダビデ、主のみこころをそこなう(11:1-12:31)

- A ダビデ、ラバの町を包囲するためにヨアブを送る(11:1)
- B ダビデ、バテ・シェバと寝る:バテ・シェバ、身ごもる(11:2-5)
- C ダビデ、ウリヤを戦死させる(11:6-17)
- D ヨアブ、ダビデに使者を送る(11:18-27a)
- X **ダビデ、主のみこころをそこなう(11:27b)**
- D' 主、ダビデに預言者を送る(12:1-14)
- C' 主、ダビデの長子を打つ:長子、死ぬ(12:15-23)
- B' ダビデ、バテ・シェバと寝る:バテ・シェバ、身ごもる(12:24-25)
- A' ヨアブ、ラバの町を包囲し、ラバを捕えたと報告する(12:26-31)

第二サムエル記13章は、愛(1-2)で始まり憎しみ(21-22)で終わる。ストーリーの中心は、愛が憎しみに転ずる14b-15aの箇所だ。1-22の全体に統一性のあるはっきりした枠組みがある。アブシャロム、タマル、アムノンの三人は1-22bの「インクルージオ」と呼ばれる形式の反転構造によって始めと終わりが関連づけられている。つまり、13:1でアムノンは愛し、13:22でアムノンは憎まれる。

13章の構造はキアスマスだ(概略6.2)。王位継承者であるアムノンは、意のままに欲しいものを手に入れることができた。立場としてはエデンの園のアダムとエバと同じである。アムノンは、美しく目に慕わしいが禁じられているはずの異母妹を激しく求めた。そのときは失望することなど想像もできなかったが、実際には欲が満たされるやいなや彼女を恋した以上に激しく憎む。対してタマルは王の娘でありながら、無節操な王子に将来を破壊され、惨めさと失意のうちに取り残される。両者の悲劇は、悪賢いヨナダブの介入によって生み出されたものだ。明らかにヨナダブは意図して問題を起こそうとしている。一方アブシャロムは妹がはずかしめられたことについて復讐を企てるが、このときは平静を装う。

### ■概略6.2 アムノンはタマルをはずかしめる(第二サムエル記13:1-22)

- A アムノン、タマルを恋する(1-2)
- B 悪賢いヨナダブの介入(3-5)
- C タマル、到着する(6-9a)
- D アムノン、家来をその場から去らせる(9b)
- E アムノン、タマルにいっしょに寝よう命じる:  
タマル、アムノンを思いとどませようとする(10-14a)
- X **アムノン、タマルをはずかしめてこれと寝る:**  
**愛が憎しみに変わる(14b-15a)**
- E' アムノン、タマルに去るよう命じる:  
タマル、アムノンを思いとどませようとする(15b-16)
- D' アムノン、召使を呼ぶ(17)
- C' タマル、追い出される(18-19)
- B' アブシャロムの介入(20)
- A' アブシャロム、アムノンを憎む(21-22)

このキアスマスの中心(14b-15a)は、異母妹に対するアムノンのひどい仕打ちを描く。はじめに彼女をとらえ(13:11)、この陰惨な場面の間じゅうアムノンは彼女をとらえ続けていたことが明らかである。

13:15aを直訳で見ると小さなキアスマスであることがわかる。タマルに対して突然生じるアムノンの憎しみが強調される。

- a そしてアムノンはタマルをきらった
- b 憎しみにかられて
- c ひどく
- x 非常に確かに
- c' ひどかった
- b' 憎しみは
- a' 彼が彼女を憎んだときの

さらにタマルに対するアブシャロムの助言(13:20)は、アムノンに対するヨナダブの悪知恵による助言(3-5)と並行しており、ヨナダブとアブシャロムそれぞれの助言の関連が強調される。文学的構造からいえば13:20は凝った作りになっている。次のキアスマスを見てみよう。

### ■第二サムエル記13:20の構造

- a 彼女の兄(アブシャロム)
- b おまえの兄(アムノン)
- x 私の妹(タマル)
- b' おまえの兄(アムノン)
- a' 彼女の兄(アブシャロム)

始めと終わりから中心に向かって配列されるばかりでなく、所有格のくり返しによって登場人物が「人物3→人物2→人物1→人物2→人物3」の順序で示される。タマルが中心に置かれ、その外を悪い兄が取り囲み、さらにその外側を「私の妹」と呼ぶ良い兄が取り囲む。始まりは中心にある。

サムエル記において駆使されている文学技法の特徴は、最小単位のストーリーが二部構成になっていることだ。建築物と同じように、一方が土台、もう一方が建物部分にあたる。例を見てみよう。

### ■場面の構成(第二サムエル記13:1-22)

- ヨナダブ-アムノン
- アムノン-ダビデ
- ダビデ-タマル
- タマル-アムノン
- アムノン-召使
- 召使-タマル
- タマル-アブシャロム

13章で用いられた「欲求-欲求充足」というテーマは14章にも現れる。9章から20章まではひとつづきのダビデ王朝の歴史であるが、途中にある13章と14章だけは「欲求-欲求充足」というテーマを持っており、これらの章が独立したストーリーであることがわかる。14章は、ゲシュルに逃亡したアブシャロムをエルサレムに帰らせようとするヨアブの計画が成功するストーリーだ。14章の登場人物の中では、ヨアブとアブシャロムだけが名前で呼ばれる。ただし14:27でアブシャロムに生まれた娘として紹介されるタマルは例外である。登場人物はほかに二人いる。一人は「王」(明らかにダビデだが一度も名前は現れない)であり、もう一人は「テコアの知恵ある女」だ。

14:1と14:33は「アブシャロム」という単語で終わる同形式の節である。この二つが樁となってストーリーを包んでいるので、14章は「インクルージオ」形式であることがわかる。ほかに「アブシャロム」という単語で終わる節は14:21しかない。したがって14:21から14:33までは、14章に組み込まれた「子セクション」である。そして子セクションの構造は、14章全体を鏡のように反映する。それでは、前半の14:1-20は子セクションとして見ることはできるだろうか。始まりの14:1と、終わりの14:20に「知る」(訳注:新改訳では「気づいた」「ご存知ですから」という単語が含まれている。これによって、ヨアブがダビデの感情を知り(14:1)、ダビデがヨアブの意図を知る(14:20)ことを示す並行関係が表される。

### ■概略6.3 テコアの女の嘆願が成功する(第二サムエル記14:1-20)

- A ヨアブ、「知った」(1)
- B ヨアブ、知恵のある女に指図する(2-3)
- C 女、王に嘆願を始める(4-5a)
- D 第一の嘆願(5b-10)
- X 女、「息子」の命を救う嘆願をして聞き入れられる(11)
- D' 第二の嘆願(12-17)
- C' 王、女に質問を始める(18-19a)
- B' 女、ヨアブの指図だったことを認める(19b)
- A' 王、「知る」(20)

キアスマスの中心は、知恵のある女の嘆願が王に聞き入れられる箇所だ。これによって女は第二の嘆願への足がかりを得る(12-17)。さらに、女は神について7回言及する(11,13,14,15,17)。

もう一度まとめてみよう。今まで見たように14章はインクルージオ形式だ。つまり、最初の14:1と最後の14:33は、それぞれ「アブシャロム」という単語で終わる文である。そして14:21-33の子セクションも同じインクルージオでくくられている(概略6.4)。しかし子セクションの中で「アブシャロム」がひんばんにくり返される(22節と26節だけが「アブシャロム」を欠く)にもかかわらず、鍵となる人物は一貫してヨアブであり、彼は王とその息子の和解を画策し、最終的にそれを成し遂げる。次のように、ヨアブは14章のストーリーに含まれる二つの対話の中心人物である。

- 1.王語る(21)–ヨアブ語る(22)–王語る(24)
- 2.アブシャロム語る(30)–ヨアブ語る(31)–アブシャロム語る(32)

### ■概略6.4 第二サムエル記14:21-33の構造

- A 王がヨアブにアブシャロムを連れ戻すよう指示する(21)
- B 王、アブシャロムが王の顔を見ることを禁じる(22-24)
- C アブシャロムの美しさ(25)
- X アブシャロムは髪を毎年刈っていた(26)
- C' アブシャロムの娘の美しさ(27)
- B' アブシャロム、王の顔を拝することを願う(28-32)
- A' 王、アブシャロムを呼び寄せる(33)

15章から20章までは、ダビデの王朝の歴史のストーリーのうちでも最も長く、範囲がはっきりした箇所である(13章-20章、厳密には13:1-20:22)。13章-14章(「欲求-欲求充足」)のテーマとは異なる「逃亡-帰還」というテーマを持つ。このようなテーマが存在すること自体、この箇所がキアスマス分析にふさわしいことを示している(概略6.5)。

### ■概略6.5 アブシャロムへのアヒトフェルの助言(第二サムエル記15-20)

- A アブシャロム、ダビデに対して反乱を起こす(15:1-12)
- B ダビデ、エルサレムから逃れる(15:13-37)
- C ダビデ、ツィバに好意を示す(16:1-4)
- D シムイ、ダビデをのろう(16:5-14)
- X アヒトフェル、アブシャロムに助言する(16:15-17:29)
- D' ヨアブ、アブシャロムを殺す(18:1-18)
- C' ダビデ、アブシャロムのために喪に服す(18:19-19:8)
- B' ダビデ、エルサレムに戻る(19:9-43)
- A' シェバ、ダビデに対して反乱を起こす(20:1-22)



概略6.5の各アウトラインは、さらに細かいキアスマスを含む。たとえば、D(シムイ、ダビデをのろう, 16:5-14)の箇所は次のように展開できる。

■概略6.5.1 第二サムエル記16:5-14

- a ダビデ、バフリムに近づく(5a)
- b シムイ、ダビデに石を投げる(5b-6)
- c シムイ、ダビデをのろう(7-8)
  - x アビシャイ、シムイの首を取ろうとする(9)
- c' ダビデ、シムイののろいを受け入れる(10-12)
- b' シムイ、ダビデに石を投げる(13)
- a' ダビデ、目的地に着く(14)

概略6.5のシェバの反乱(20:1-22)は、アブシャロムの反乱(15:1-12)に対応する。20:6でダビデがアビシャイに語る言葉「今や、ピクリの子シェバは、アブシャロムよりも、もっとひどいわざわいを、われわれにしかけるに違いない。」は、アブシャロムの反乱とシェバの反乱のストーリーを強く対比させる。

20:1と20:22bとは両者とも「彼は角笛を吹き鳴らした」という文で終わっており、インクルージオ形式である。つまり、この2文ではさまれた箇所が、それ以外から区別されることを表す。そしてその内側はキアスマス構造であると推測される。

■概略6.6 第二サムエル記20:1-22b

- A シェバ、ダビデから離れる(1-2)
- B ダビデ、シェバの討伐に動き出す(3-7)
  - X ヨアブ、ライバルのアマサを殺す(8-13)
- B' アベル・ベテ・マアカの知恵ある女がシェバを討つ(14-22a)
- A' ヨアブ、ダビデのもとに帰る(22b)



## VII. ダビデの最晩年とソロモンの王位継承(第二サムエル記21-第一列王記2)

サムエル記の結びである7番目の大きなストーリーのまとめは、ダビデの支配のようすを詳しく描き、ソロモンへの王位継承を述べる(概略7)。このストーリーの終わりに第一列王記の最初の2章が含まれているが、それには少なくとも二つの理由がある。

### [理由1]

ダビデ王の偉大な歴史のストーリーが、疫病の裁き(第二サムエル記24)で終わるのであれば中途半端だ。記者はストーリーの結末であるダビデの死の前後を詳しく書いている。しかしそれは第一列王記1章と2章に含まれている。

### [理由2]

サムエル記で登場した人物、ヨアブ、シムイ、エブヤタル、ツァドク、ベナヤについての詳しい記述は第一列王記1章-2章に現れる。つまり、第一列王記1章-2章においてサムエル記の人物たちのストーリーが収束するのだ。ソロモンの王位継承の導入を強調するために、後代の聖書編集者たちはダビデの死のストーリーを、サムエル記の終わりから列王記の始めに移動したと想像される。

### ■概略7 ダビデの最晩年とソロモンの王位継承(第二サムエル記21-第一列王記2)

#### A サウルがギブオン人を殺したことによるききん(第二サムエル記21:1-14)

—主が国の祈りに答えられる(21:14)

#### B ダビデの勇士たちの活躍(21:15-22)

—ペリシテ人の闘士を倒したストーリーの詳細

#### C 主をたたえるダビデの歌(22:1-51)

#### C' ダビデへの主の言葉(23:1-7)

#### B' ダビデの勇士たちの活躍(23:8-39)

—ペリシテ人の闘士を倒したストーリーの詳細

#### A' ダビデが人口調査をしたことによる疫病(24:1-25)

—主が国の祈りに答えられる(24:25)

#### 結び:ダビデの死とソロモンの王位継承(第一列王記1:1-2:46)

—王国はソロモンによって確立した(2:46)

第二サムエル記21章-第一列王記2章の構造は通常は見られないパターンだ。全体は7部からなる(第一列王記1章-2章を含めた場合)が、第二サムエル記21章から24章までは6部に分かれた一つのキアスマスであり、最後の第一列王記1章-2章は独立して別の構造を持つ。詳しい話に入る前に、もう一度第一サムエル記からの全体の流れを思い出してみよう。

第一サムエル記1章-7章 イスラエルの王制の始まり

第一サムエル記8章-15章 イスラエルの王制の実施

第一サムエル記16章-31章 王国の確立

第二サムエル記1章-20章 ダビデによる王国の安定化

というストーリーが第二サムエル記21章-24章の前にあった。これにつづく第二サムエル記21章-24章の目的は、威厳に満ちたさばきつかさサムエルの歴史、サウルの歴史、ダビデの歴史をまとめることだ。

このまとめの部分について、神学的な重要性が低いと考えたり、その前に述べられている王朝の歴史の箇所よりも重要性が低いと考えるのは大きな誤りである。散文と詩を組み合わせた高度な技巧は、イスラエルの偉大な王の歴史の幕を閉じるのにふさわしい。第二サムエル記21章-24章は、めったやたらにつき足された「おまけ」などではなく、ダビデの生涯を「メシアの予型」として神学的に記述するために計算されたものだ。

### ■概略7.1 第二サムエル記21-24の構造

- A イスラエルに対する主の怒り(21:1-14)
- B ダビデの勇士たち(21:15-22)
  - C 主をたたえるダビデの歌(22:1-51)
  - C' ダビデへの主の言葉(23:1-7)
- B' ダビデの勇士たち(23:8-39)
- A' イスラエルに対する主の怒り(24:1-25)

この種のアウトラインは、時間的順序の正確さよりも技巧を優先させるものともいえる。第二サムエル記21章-24章が確かにひとつづきであることを示す二重インクルージオにも注目したい。下記のように、このインクルージオは21章の初めの節と24章の終わりの節を連結する。

- 三年間引き続くききん(21:1)
- 三年間のききん(24:13)
- 神はこの国の祈りに心を動かされた(21:14)
- 主が、この国の祈りに心を動かされた(24:25)

ダビデへの主の言葉(C' 第二サムエル記23:1-7)は、それ自体をキアスマスとして展開できる。神が立てられた王ダビデのありさまを歌の中心部に置くことによって、「主」がダビデの最後のことばの中心になるように構成されている。主が中心であるがゆえに、これが「最後のことば」なのだ。

#### ■概略7.1.1 第二サムエル記23:1b-7

- a ダビデ、三人称形で自分を紹介する(1b-e)
- b ダビデ、一人称形で語る(2-3b)
  - x 主が語られる(3c-4)
- b' ダビデ、一人称形で語る(5)
- a' ダビデ、三人称形で悪者を描写する(6-7)

#### ■概略7.2 ソロモンの王位継承(第一列王記1-2)

- A アドニヤ、王位を奪おうと画策する(1:1-11)
- B アドニヤの画策、覆される:ソロモン、アドニヤを責めない(1:12-53)
- C ダビデ、ヨアブとシムイを殺すことをソロモンに指示する(2:1-9)
  - X ダビデの死(2:10-22)
- A' アドニヤ、再び王位を奪おうと画策する(2:13-22)
- B' アドニヤの画策、覆される:ソロモン、アドニヤを打ち取る(2:23-25)
- C' ソロモン、ヨアブとシムイを打ち取り、エブヤタルを罷免する(2:26-46)

サムエル記では、イスラエルの指導者として祭司、預言者、王(エリ、サムエル、サウル、ダビデ)の三つの職が、予測できる形で秩序立って引き継がれていった。それに比べてダビデの後継者選びは、先の読めない不安定なものだったことがストーリー全体からうかがえる。

ダビデ王の後継者が決まるまでに信じられないほど多くの犠牲が払われた。ダビデの息子のうち四人(アムノン、バテ・シェバの初子、アブシャロム、アドニヤ)は、第一列王記2章までの間に、人の罪によって起こされるあらゆる災禍と戦乱の中で死んでしまう。直接的であれ間接的であれ、それぞれの死にははっきりした原因があった。

第二サムエル記7章では、後継者が誰であるか知らされないまま、ダビデが神に選ばれた王であり、しかもダビデの家が王の家系として永遠に立てられるという約束が与えられる(第二サムエル記7:1-17)。これに先立って、ダビデがユダとイスラエル両方を治めている時期にダビデの息子たちの名前が挙げられている(第二サムエル記3:2-5)が、ここには六人しかいない。注意深い読者なら、いるはずの七番目の人物が欠けていることに気づくだろう。七番目は誰だろうか。ふつう重要人物は七番目に登場するものと決まっている。たとえばボアズはベレツから七代目の人物だ(ルツ4:18-21)。その後ダビデに与えられた息子たち(第二サムエル記5:13-15)の名前のリストにもはっきりした手がかりはない。彼らはダビデがさらにめとったそばめたちと妻たちから生まれた(第二サムエル記5:13)。ソロモンの名前はリストの四番目にそっけなく挙げられているだけである。後継者に関する情報がほとんど明かされていないのは、統一された新王国のこれからの長い道のりと、王家の前途に横たわる苦難とを示しているのだろうか。文学的構造によく注意するならば、これらのことに気づかないではいられないのである。



